

恨みと反逆と甘え——我々の共有するサタンの精神構造

Greatchain

2018/08/23

「アンティファ」と呼ばれる左翼暴力集団が結集し、トランプやトランプ支持者を標的にして騒ぎ、CNN が極端な発言でこれを煽った事件のことは、先日、紹介した。このニュースに添えられた現場写真を見ると、This Is War のほかに、Become Ungovernable (手に負えない者になれ) というプラカードが見える。これは彼らの精神をよく表している。「手に負えないものになれ」とは、「駄々っ子になれ」というといことで、誇りをもって生きている人間は、誰一人そんなものになりたくないが——まして警察と戦えと言われたら——これが左翼的な反逆の仕方である。これは使喚する者が言っているのか、される者が言っているのかわからないが、どちらでも同じである。左翼的とは、盲目的反逆、すなわちサタンの反逆ということである。前世紀の、大荒れに荒れた左翼学生運動が、まさに「駄々っ子」運動だった。不満と恨みをもっていて破壊だけするが、建設という動機は持たなかった。これは彼らが無神論・唯物論者で、その意識はないが、いま荒れているサタンの破壊につながっていたからである。今これをはっきり言うことができる。

神とかサタンなど存在しませんよ、我々は「迷信」は教えませんよ、という運動を、サタン信仰者がやっている。これは「サタン寺院」が小学校へ持ち込もうとする課外教育アジェンダが、まさにそう言っている。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180814-2.pdf> メディアなどは、その教育方針を支持することによって、彼らを支持している。

「ルシファーの正体を暴く——ホログラフ的な、怒って暴れまわる子供」(2014/2/26)
<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/140226.pdf> という、デイヴィッド・ウィルコックのやや長い論文がある。最初の部分を引用する——

ルシファーとは、怒って反逆する子供としての、我々の一部の、ホログラフィックな反映であり、このものが「パパもママもくたばれ！」と叫んで、挑戦的に暴れているようなものだと考えることができる。

この我々の内部の、傷ついた子供を癒すことによって、我々は現実に、集団に影響を与えるかもしれない。そして惑星的規模で、「陰謀団」の敗退を早めることができるかも

しれない。

ここにその粋が述べられている。

ホログラフィーとは、一部の中に全体の構造を宿す宇宙的原理のことであり、我々は誰でも、この親を恨む「傷ついた子供」のような一面をもっている。サタンも、より大きなレベルで、そのように神を恨む、「駄々っ子」反逆者であるという認識に至ることによって、はじめて本当の問題解決の手掛かりが見えてくる。我々人間は本来、一体なのだから、「我々」対「あいつら」という考え方が、そもそも間違っている。その前提を崩さなければ、いつまでたっても問題は解決しないと言っている。我々が集団として、自己＝他者（全体）を癒すという立場に立つことができれば、「現実には、集団に影響を与え、…惑星的規模で、〈陰謀団〉の敗退を早めることができるかもしれない」と、ウィルコックは言っている。

そこから、「集団瞑想」というものが、原理としては、ほとんど唯一の、この荒れすさんだ世界を癒す有効な方法として提案されている。これは科学的に証明された事実で、これを唱える人は、ウィルコックのほかには、一人しかこのサイトでは紹介していないが、同じことを考える人は他にもいるだろう。「祈る」必要はなく、ただ愛と平和の思いをもって大勢の人が、集団で瞑想するだけで、暴力や犯罪や戦闘行為が 72 パーセント減少した。

http://www.dcsociety.org/2012/info2012/140226_2.pdf

いま世界で起こっていることを見ると、ペドフィリアの流行と言ひ、ロンドンの放置される凶悪犯罪と言ひ、まさに世界そのものが、一人の荒れすさんだ少年のイメージではないか？ ロンドンの場合は、非白人の白人に対する、歴史的に積み重なった恨みが爆発し、一気に復讐しようという動機が働いていると思われ、また、この不平不満を利用して暴動を起こし、神から世界を奪ってやろうという、より大きな不平不満分子が、地球規模の「陰謀団」として存在していると思われる。これは正当な復讐ではないのか？ “権利”ではないのか？ しかし復讐は何も解決することはできない。何も生み出さない。我々は何かを生み出すような精神構造へと、自分を切り替えねばならない。それは「許すこと」だとウィルコックは言う。これは古い、囚われた人間の立場からすれば、消極的なことのように見える。しかし、実は全くその逆であり、それは宇宙進化への能動的参加である。甘えや被害者意識を捨てることである。神に反逆することではなく、神に協力することである。

新約聖書の中で最も感動的なエピソードの一つは、「放蕩息子」すなわち、荒れすさんだ息子の物語であろう。ウィルコックは、先の引用論文でこれに言及している。老父は神であり、放蕩息子はサタンである。元々神の庇護のもとにあつて、協力すべき関係にあつたサタンが、何らかの不平不満から怒り狂い、サタン（反逆する者）として家を飛び出し、世界を放浪す

るがうまく行かず、父の家に戻ってくる。彼はどれほどの罰を受けると恐れたが、父は叱るどころかすべてを許し、息子を抱きしめて大歓迎した。——この物語にどう反応するかが、我々の運命を決めると言って差し支えない。

参考文献：「ルシファー最後の蜂起」(2012/08/22)

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/120823.html>